

「世界にひとつのプレイブック」★★★★★

2013（平成25）年1月24日鑑賞＜GAGA試写室＞

監督・脚本：デビッド・O・ラッセル
原作：マシュー・クイック『The Silver Linings Playbook』
パット（妻の浮気が原因で心のバランスを崩してしまった男）／ブラッドリー・クーパー
ティファニー（事故で夫を亡くし、心に傷を抱えていた女）／ジェニファー・ローレンス
パット・シニア（パットの父）／ロバート・デ・ニーロ
ドロレス（パットの母）／ジャッキー・ウィーヴァー
ダニー（パットの精神病院の友達）／クリス・タッカー
クリフ医師（パットの主治医）／アヌバム・カー
ヴェロニカ（ティファニーの姉）／ジュリア・スタイルズ
ニッキ（パットの妻）／ブレア・ビー
2012年・アメリカ映画・123分
配給／ギャガ

＜プレイブックって、一体何？＞

今年1月3日の「ライスボウル」では社会人代表のオービックスガールズが、学生代表の関西学院大学ファイターズを下し、社会人初の3連覇を達成した。私は昨年に続いて今年もフィットネスクラブのランニングマシンで時速8kmで走り（歩き？）ながら、約3時間半その試合をテレビで観ていたが、終盤3分に至っての逆転に次ぐ逆転劇は見応えがあった。もっとも、アメリカン・フットボールのルールは複雑で、私はその詳しいルールをまったくわかっていない。したがって、残り3分で関学が14対15と逆転することになった「2ポイントコンバージョン」とは何か？また残り時間3.4秒を残してディフェンスとオフェンスがなぜ交代したのかもまったくわかっていない。このように、アメフトは体力のみならず、知力の勝負でもある。それはオフェンス、ディフェンスのフォーメーションが何十通りも、何百通りもあり、プレーヤーはそれを頭に叩きこんだうえで戦わなければならないからだ。

しかし、本作の原題『Silver Linings Playbook』のうち、邦題にも使われている「プレイブック」とは、アメフトのチームそれぞれが持っている作戦図のこと。本作のプレスシートの表紙はそんな原題にふさわしい作戦図が書かれているが、人生にプレイブック（作戦図）なんてあるの？そんなものはあるはずがないのでは？しかし、人生にはプレイブックはないけれど、誰もが心の中に不完全でも世界にひとつだけのプレイブックを持っている。だから、自分らしくベストをつくせば、必ず希望の光は射してくるのでは？そんな願いをこめてつけられた邦題が『世界にひとつのプレイブック』だ。さあ、本作の2人の主人公が持つ、それぞれのプレイブックとは？

＜一方の主人公は、家も仕事も妻もすべてを失くした男＞

映画冒頭、本作でアカデミー賞主演男優賞にノミネートされたブラッドリー・クーパー演ずるパットの精神病院における姿が描かれていく。とは言っても、パットが『危険なメソッド』（11年）でキーラ・ナイトレイが口をゆがめ顔を引きつらせて熱演したような重篤な（？）精神病患者（『シネマルーム29』121頁参照）でないことは、頭と身体を鍛えて妻の理想的な男になれば、必ずヨリを戻せると信じているらしいその言動から明らかだ。パットが精神病院に収容されたのは、妻ニッキ（ブレア・ビー）の浮気現場を自分の目で見たことによって心のバランスを崩したため。8カ月間も精神病院への入院を余儀なくされて、やっと今退院が許されたパットを待っていたのは、妻が「接近禁止令」を裁判所に出してもらったまま家を去って出ていった、という最悪のニュースだ。

高校の教師もクビになりすべてを失ったパットは、父パット・シニア（ロバート・デ・ニーロ）と母ドロレス（ジャッキー・ウィーヴァー）が住む実家に戻って一緒に暮らし始めたが、そこで見せるパットのハチャメチャぶりが面白い。ヘミングウェイの『武器よさらば』が悲劇的な結末だったかどうか私は覚えていないが、その悲劇的な結末が許せないと言って、パットが明け方の4時にわめきちらすのは如何なもの。他方、退院の条件としてセラピーを受けることが義務づけられていたパットがクリニックに着くなり、BGMでスティヴィー・ワンダーの『マイ・シェリー・アモール』が流れてきたのは偶然とはいえパットの不運。この曲はパットとニッキの結婚式の曲であると同時に、パットがニッキの浮気の現場を目撃した時に流れていた曲で、パットは以来この曲を聞くとパニックを起こし呼吸困難に陥ってしまうからだ。私にはあまりなじみのないハンサム男優ブラッドリー・クーパーが、そんなやたら早口で怒鳴りまくるパット役を熱演している。やはりアカデミー賞主演男優賞にノミネートされるのは、こんなキャラの立った男の方が有利なのかも・・・。

＜もう一方の主人公は、夫を亡くし心が壊れた女＞

本作のもう一方の主人公は、『あの日、欲望の大地で』（08年）（『シネマルーム23』38頁参照）、『ウィンターズ・ボーン』（10年）（『シネマルーム27』59頁参照）で私が注目し、『ハンガー・ゲーム』（12年）（『シネマルーム29』234頁参照）、『ボディ・ハント』（12年）と出演作が続いている期待の若手女優ジェニファー・ローレンス演ずるティファニー。ティファニーはパットが友人のロニー夫妻からディナーに招かれた際にロニーの妻の妹という立場ではじめて登場するが、このティファニーもパット同様にそれ以上に変わった女だ。結婚してまだ3年のティファニーは夫を交通事故で亡くしたそうだが、なぜそうなったのかが彼女の口からパットに語られるのは中盤以降。また、夫を亡くした後、夫の死を忘れるために会社の男全員と寝たという驚くべき武勇談（？）を聞かせるのも、中盤以降だ。

はじめてパットと出会った時のティファニーは、えらく無礼な態度をとったかと思うと、その直後には「電気を消して××しない？」とパットを誘うからパットが面喰らったのは当然。さらに、「僕はそんな男じゃない」とパットに拒否されるとキレてしまい、パットに平手打ちを食らわせてしまうような女だから、こりゃ始末が悪い。また、身体を鍛えることに奇妙に固執するパットがいつものようにジョギングをしていると、そこにまつわりついてきたのがティファニー。その言い草は「なぜ、うちの近所を走るの？」というものだから、こりゃケンカを売っているのと同じだ。さらに「俺より君の方がクレイジーだ」と指摘するパットに対して、ティファニーは「過去を含めて自分が好きよ。あんたに同じことが言える？」と逆説教する始末だ。そんな中盤の展開を見ている限り、この2人は「永久に天敵！」と思えてしまう。

本作後半からクライマックスにかけてダンスシーンで美しい肢体を見せてくれるジェニファー・ローレンスがここまで悪態をつく女を熱演するのはちょっと意外だが、やはり主演女優賞にノミネートされるには、こんなキャラの濃い女の方が有利？

＜ロバート・デ・ニーロ演ずる父親も、大きな役割を！＞

ロバート・デ・ニーロ演ずる父親パット・シニアも息子同様ちょっと変わっており、こちらはアメフト命・・・？アメリカの大リーグやアメフトの世界では日本以上に熱狂的なファンが多いが、パット・シニアは熱狂的なイーグルスのファンらしい。最近失業したパット・シニアは、チーズステーキ店の開店資金を稼ぐためにアメフトのノミ屋を始めたから、イーグルスの勝敗に一家の将来がかかることになったが、それって基本的にヘンなのでは？本作は主演男優賞と主演女優賞にノミネートされたブラッドリー・クーパーとジェニファー・ローレンスの2人が主人公を演じるが、後半からクライマックスにかけてはダンスの勝負にかけるパットとティファニーの他、イーグルスの勝敗に全財産を賭けるという「暴挙」に出るパット・シニアの役割も大きくなってくる。

ロバート・デ・ニーロといえば主役で二枚目役と決まっていたが、本作でみせる息子とのかけ合い劇はお見事。前半は暴れ回る息子に手を焼いていたパット・シニアも、後半からクライマックスにかけては共通の目標に向かって共に走り続ける信頼厚き父子に変化し、感動的なフィナーレに結びついていく。このように本作のストーリー展開に大きな役割を果たすパット・シニアに対して母親のドロレスの方はセリフも少なく万事控え目だが、こちらも「家族の絆」の要としてその存在感が光っている。したがって、この2人が揃ってアカデミー賞助演男優賞、助演女優賞にノミネートされたのは当然かもしれないが、主役と脇役の4人が4人とも揃って個人賞にノミネートとは、すごい快挙！

＜2人の仲の、この急転換に注目！＞

映画前半では「永久に天敵！」と思っていた2人の仲が急転換するのは、パットが通うセラピーの主治医クリフ医師（アヌバム・カー）からの「あるアドバイス」によるもの。それは「ティファニーはパットの妻であるニッキの知り合いだから、パットがティファニーと知り合いになり夫の死から立ち直れない彼女に優しくすれば、人助けができるほど回復したと妻に思われるはず」というものだ。なるほどそんな手もあり。そう納得したパットは例によってジョギング中に出会ったティファニーを夕食に誘ったが、本作にみるその食事風景はかなり変わっている。盛装してきたティファニーの美しさは、パットならずとも私たちも「ウオー！」。しかし、ディナーに来たはずなのに、パットが注文したのは何とシリアルだけ。仕方なくティファニーはそれに合わせて紅茶を注文したが、これっておかしい？

ここでの最大のポイントは、「ニッキ宛の手紙を書いたら、それをニッキに渡してあげようか」とティファニーが提案してきたこと。パットには裁判所の「接近禁止令」が出ているからティファニーのそんな行為は裁判所の命令に反する違法行為だが、なぜティファニーはそんな提案を？さらに、ティファニーはこの席で夫の死後そのショックを忘れるため会社の全員の男と寝たという話をして、自分の「心を開いた」が、そんな話を聞いてパットがティファニーを軽蔑したような態度を見せたからティファニーはブツン！そこから展開される美男美女による最悪の事態が本作中盤の「見どころ」だから、それはあなた自身の目でタップリと。危うく警察沙汰となり、パットの逮捕、精神病院への逆戻りかと思われたが、急に冷静さを取り戻したティファニーの機転によって何とかその場が収まったのはラッキーだった。

そして、ここからストーリーは最終章へ。ニッキ宛に書いた手紙をティファニーに渡しに行ったパットに対してティファニーは、意外にも（したたかにも？）自分のパートナーとしてダンスコンテストに出場することを「交換条件」として出したが、パットはダンスなど全くの素人。したがって、当初そんな交換条件を拒否したが、「それなら手紙を渡さない」と迫られると・・・。

＜さすが、やる時はやる！＞

ダンスをテーマにした映画で、私がもっとも印象に残っているのは『フラッシュダンス』（83年）だが、邦画にも日本アカデミー賞やその他の賞を総ナメにした『Shall we ダンス？』（96年）がある。前者はプロ、後者はアマという違いはあるが、両作ともその「努力」の過程がストーリーの軸になっていた。もちろん、本作でも渋々ダンスコンテストへの出場を決めたパットがティファニーとダンスの練習を始める中で生まれてくる心の交流がクライマックスの高揚へとつながっていくわけだが、問題その1は練習期間が短いこと。問題その2は、その間にもいろいろなトラブル（？）が重なってくるため、ティファニーの思うような練習ができないことだ。そんな状況にティファニーはイライラ。このコンテストに出場するダンスペアはプロを含む一流ばかりだから、こんな状況では優勝などとてもとて

も・・・。

さらにダンスコンテストの会場にはパットの妻であるニッキも参加するそうだから、そこでは一歩乱が？それとも逆に、感動の再会が？そんなこんなの期待（？）が高まってくるのは、前述したパットの父親であるパット・シニアがやむにやまれず仕掛けた2つの賭けが背景にある。すなわち、その1つはイーグルスの勝敗で、もう1つは2人のダンスペアが10点満点の採点で審査員から5点以上をとれるかどうかという勝負だ。2人の前を踊るプロを含むダンスペアの採点は概ね7～8点代。そんな中パットとティファニーのペアは？

誰がどう見ても5点以上はムリだろうと思うものの、黒いロングコートを脱ぎ捨てて颯爽とポーズをとるティファニーのかっこよさを観ていると・・・。さらに、あれほどダメ男だったパットだってイザとなると・・・。2人ともやる時はやる！しかしその結果は？そして、感動のフィナーレは？